

1. 評価結果概要表

作成日 平成 19年 7月 21日

【評価実施概要】

事業所番号	2070800269		
法人名	有限会社 せせらぎ		
事業所名	グループホーム せせらぎ		
所在地	小諸市大字加増851番地19 (電 話) 0267-26-5355		
評価機関名	コスモプランニング有限会社		
所在地	長野市松岡1丁目35番5号		
訪問調査日	平成19年6月19日	評価確定日	平成19年7月17日

【情報提供票より】 (平成19年6月8日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 12年 9月 29日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	13 人	常勤	2人, 非常勤 11人, 常勤換算 7.4

(2) 建物概要

建物構造	木造瓦葺	造り
	2階建ての	～ 1階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	40,000～45,000 円	その他の経費(月額)	22,000 円	
敷 金	有 (円)	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有 (円)	有りの場合 償却の有無	有 / 無	
食材料費	朝食	300 円	昼食	500 円
	夕食	600 円	おやつ	0 円
	または1日当たり 円			

(4) 利用者の概要 (6月 8日現在)

利用者人数	8 名	男性	0 名	女性	8 名
要介護 1	1	要介護 2	4		
要介護 3	0	要介護 4	3		
要介護 5	0	要支援 2	0		
年齢	平均 82.5 歳	最低	67 歳	最高	90 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	1. 鈴木医院(内科・胃腸科・外科) 2. 小諸高原病院(精神科) 3. 林歯科診療所(歯科)
---------	---

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

長年認知症高齢者との係わりをもってきた管理者は退職後、自宅横にグループホームを立ち上げた。そして、住民の認知症に対する理解、認知症への早期対応が認知症の進行遅延に不可欠であることなどをメディアを通して訴え、講演し、実践している。近所に住む認知症高齢者にもホームの入居者と同じように眼を向け支援している様子は感動を覚え、地域密着型サービスの先駆者として畏敬の念も覚えた。
管理者、職員、管理者の家族も入居者を支え、逆に支えられながら、家族以上の親密な関係を築いている。笑い声が絶えない温かみのあるホームであり、再び訪問したくなるような気持ちにさせられるホームである。

【重点項目への取組状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取組、改善状況(関連項目:外部4)
	評価で見出された課題等については全職員で検討し、改善に努める仕組みができています。
重点項目①	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	管理者の評価に対する取り組みは熱心であり、評価を通してケアの質の見直しを積極的に行っている。全職員は管理者と共に評価を活かし、入居者主体の支援に努めている。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	運営推進会議を有意義な会議にするために熱心な啓蒙活動を行っているが、会議はまだ円滑に推進されているとは言えない状況である。参加メンバーの一人ひとりに会議の意義や役割等を理解していただき、双方向的な会議になるよう更に働きかけて頂きたい。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	家族会はないので家族からの意見、苦情、不安等については面会や生活状況報告時などの機会を利用し、何でも言ってもらえるような雰囲気づくりに努めている。出された意見、要望は全職員で話し合い反映させている。入居者家族はホームに対して厚い信頼を寄せている。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	開設当初から隣近所の人たちとの馴染みの関係を築き続けている。毎日、近所の認知症高齢者を誘い、入居者たちと一緒にウォーキングをしている。また、ホーム内での出張歯科には入居者に混じって近所の高齢者も治療に通っている。入居者が地域の中で地域の高齢者と同じように暮らしていけるように、地域住民との関係作りの場を考え、積極的に働きかけている。

2. 評価結果（詳細）

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	基本的な姿勢は変わらないが、開所当時の理念を手直しし、認知症の理解、その対応時期の大切さ等を取り入れ実践している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	管理者は認知症高齢者に長年係わっており、グループホームの意義、役割を十分理解している。その上で職員と共に入居者や近所の高齢者に対し日常的に係わっている。入居者家族からの利用相談があれば実施地域外等の難問があっても積極的に取り組む姿勢には察するにあまりあるところがある。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	管理者は認知症についての正しい理解を促進するため、家族や地域住民を対象とした講演活動を意欲的に行っている。毎日のウォーキングですれ違う住民らと挨拶を交わし交流を深めている。また、ホーム近くに住んでいる認知症高齢者を誘い、入居者らと一緒にウォーキングしている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	管理者は自己評価や外部評価をすることがケアの実際を確認できると積極的に取り組んでいる。その上で評価結果を職員に報告し、改善策を検討するなどケアの質の向上に役立っている。	○	評価結果は職員に報告され改善策へと繋がられている。サービス評価の意義や目的は職員も理解しているので、人的、時間的な余裕ができたなら、全職員で自己評価に取り組んでいただきたい。

グループホームせせらぎ

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議では、ホーム側から事前に議題を提供するなど、参加者メンバーから率直な意見をいただけるよう取り組んでいる。		
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市主導のグループホーム部会に積極的に参加し、情報交換等を行っている。広域でのグループホーム間の交流も行っている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	入居者の暮らしぶり、健康状態、金銭管理状況等は、家族が訪問した時に報告している。訪問がない場合は、電話や手紙等で定期的に報告している。金銭管理は領収書を添付し、健康状態は診療や検査の結果などをきめ細かに報告している。「ホーム便り」には多めに写真をのせ、より生活の様子が家族に伝わるように工夫している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者の弟妹が契約代理者となっていることもあり、ホームへの訪問が難しいため、家族会はない。運営推進会議のメンバーには家族の一人が参加しており要望苦情などを表せる場づくりをしている。家族の話し方、表情、態度を観ながら「何かありましたか」などの声かけをこまめに行っている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	入居者と職員の関係づくりを非常に大切にしている。管理者は職員一人ひとりの得意・不得意を見極め、役割分担し、また年一回は職員との面接を行い、個人の事情（仕事上の悩み、仕事が続けられるか、認知症に関して辛い事など）を確認している。		

グループホームせせらぎ

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	グループホーム部会、救急法等、交替で参加している。研修内容は、隔月の懇談会で報告され共有している。県主催の研修など積極的に参加できるように情報提供も行っている。研修参加者は出張扱いとされている。管理者が認知症ケアの講師でもあり、職員は日常的にトレーニングしている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	勉強会という形で広域のグループホームの代表者が定期的（毎月）に集まり、情報交換や職員研修の企画を行い、ネットワークづくりを積極的に行っている。		
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居者本人が職員やホームに馴染んでから利用を開始している。本人は入りたくない、家族は根を上げているようなケースがあっても本人の納得を得ないまま利用を開始することではなく、人間関係を築きながら徐々に利用開始を調整している。利用開始までに約半年～一年位掛かっている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は認知症を理解した上で同じ時間を一緒に過ごしている。支援する側、支援される側という意識は持たず、お互いが協力しながら穏やかな生活ができるように場面づくりや声かけをしている。職員は母親の姿や嫁、姑の関係等を思いながら支え合う関係を築いている。		

グループホームせせらぎ

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の意向・要望は、日々の関わりの中で声をかけたり、しぐさから汲み取り、把握に努めている。個人の気持ちを尊重し、見守りながら丁寧に対応しており、入居者一人ひとりに合わせ統一した対応を行っている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	入居者の視点にたって、その人らしく暮らし続けられるようにと、必要な支援が盛り込まれた個別の具体的な介護計画が作成されていた。目標指向型の介護計画が作成されている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	基本的には3ヶ月に一度見直しをしている。状態や変化に応じて随時の見直しも行い、現状にあった介護計画を作成している。家族にも介護計画を説明して要望などを確認している。		
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	自主サービスとして、特別な外出の支援、送迎サービスを行っている。また、歯科の出張診療室がホーム内に設けられ、毎週火曜日に診療が行われている。入居者以外に地域のお年寄りも通ってきている。		

グループホームせせらぎ


外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームの協力医院の他、かかりつけ医院との連携も密にとられている。入居者の健康状態に応じて相談したり、必要があれば往診、診療も依頼している。家族の希望する医療機関があれば要望にも応じている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化した場合や終末期に関しての継続については、現在前向きに検討中である。入所利用約款の約款解除の項に、要介護度が4以上になった場合は該当となっているが、現在の入居者中、それに該当する入居者3名は、継続利用中である。ホームが対応できる最大限での支援を提供中である。	○	本人や家族の意向を医療機関や関係機関と相談しながら最善の方法を模索中であるとのことであるが、今後も可能な限り対応していただきたい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	個人情報保護法の理解や情報の漏えい防止の責務は当然のことであり、ホーム全体で理解に努め、秘密保持の徹底が図られている。管理者、職員の全職員がプライバシー確保について日常的に、また、会議やミーティングの中でも話し合いを設け、確認しあっている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日、その時の本人の気持ちを尊重して個別支援を実践するために要望を聞く時間を設けている。職員は入居者のペースを守るため、職員同士の連携は「あ、うん」の呼吸で行われている。		

グループホームせせらぎ

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理、盛り付け、片付けなどを利用者と共にやっている。職員は入居者と同じテーブルを囲み一緒に味わいながら楽しい食事になるよう雰囲気作りも行っていた。旬の食材が取り入れられていた。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴を楽しみにしている入居者が多い。プライバシーに配慮しながら一人ひとりのペースでゆっくりと入浴できるよう支援している。また、入浴を望まない入居者には更衣のみを行う。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	入居者一人ひとりの力を発揮できる場面作りや楽しみが見出せるように個別に把握されている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	入居者の体調に合わせてホームの近隣でのウォーキングを30～40分、毎日行っている。季節を楽しみ、おしゃべりをしながら新鮮な空気を吸っている。入居者も職員も共に楽しんでいる。時々、買い物や近所の知人宅にも出掛けている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	鍵を掛けないケアの必要性を職員は十分に理解しているが、現在は家族の了解の上玄関に鍵を掛けている。外出傾向の入居者の様子を見守りながら必要に応じて鍵を開け、職員と一緒に外出している。	○	入居者の安全面に配慮して止むをえず行っているが、状況の好転が見られる時には鍵を掛けないケアをされることを今後も検討し続けていきたい。

グループホームせせらぎ

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年2回避難訓練を実施している。また、昼夜を問わず入居者が安全に避難できるように連絡網が作成されている。入居者は毎日のウォーキングで万が一に備え足腰を鍛えている。各居室からは直接外に出られるようになっている。		
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分の摂取状況を毎日記録し、職員は情報を共有し、旬のものを取り入れた献立を立てている。一人の入居者は、入院中には下がらなかった血糖がホーム入居後食事の管理や運動等で下がり、現在も維持している。体調を整える飲み物（カスピ海ヨーグルト、「にんにく」からの抽出成分入り健康ドリンク）を入居者、職員一緒に飲み続けている。	○	必要な食事や水分は摂れているが、今後栄養士等の専門的なアドバイスをもらい、更に食生活を充実させて欲しい。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間、食堂は明るく何時でも誰かがいて安心できる雰囲気がある。昔懐かしい音楽も流れ、また、本や雑誌が手の届く範囲にあり興味をそそる。食堂のどこに腰を下ろしても外の風景を眺めることができ、ホーム内あちらこちらに庭の花を一、二輪ずつ飾るなど、心が和む雰囲気づくりがされていた。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	沢山の洋服、机、仏壇や写真など一人ひとりに応じた持ち物で自分の部屋と認識ができ、気分よく過ごせるようにと居室づくりに心がけている。各居室の外は日本庭園が広がっており、穏やかで豊かな気持ちが醸しだされる環境づくりがされている。		

※  は、重点項目。